第二次伝道旅行に向けて

２０２２年１１月２０日

使徒の働き　１５章３０～４１節

序：エルサレム会議の意義
　異邦人への福音宣教に対して教会的な承認が示された
　　⇩
　　ユダヤ人信者　＋　異邦人信者

　異邦人もユダヤ人と同様に、割礼、律法遵守が必要か？　　否
　∵　両者とも、主イエスの恵み
　　福音のことばを聴いて信じたこと　により救われる
　　信じて、聖霊を受けた

　聖霊と教会は　異邦人キリスト者に、必要以上の重荷を負わせないことを決定
　　最少限守るべきこと以外は
　　偶像に供えたもの
　　血
　　絞め殺したもの　を避ける
　　淫行

　　決議したことを書面にして、異邦人キリスト者に書き送る
　　〃　　口頭でも、信頼できる使者を遣わし、伝えさせる

　　アンティオキア教会の代表団　＝　バルナバとパウロ
　　エルサレム教会　　〃　　＝　ユダ（バルサバ）とシラス

　福音の本質、神の恵みと信仰による救い、ユダヤ人と異邦人の差別はない
　異邦人の地（地の果てまで）への宣教の基盤を確認・公認

Ⅰ．アンティオキア教会にて
　(1)送り出された一行が到着
　　教会の会衆に、エルサレム会議の決議書を手渡す
　　読んで、励まされ、喜んだ

　(2)エルサレム教会からの使者（ユダとシラス）は神のことばによって
　　アンティオキア教会の聖徒たちを励まし、力づけた
　　しばらくの滞在、平安のあいさつに送られて、エルサレムに戻る

　(3)アンティオキア教会からエルサレムに行っていた使者（パウロとバルナバ）は
　　母教会で、ほかの多くの人々とともに、神の言を教え、福音を宣教

Ⅱ．第二次伝道旅行

(1)パウロの発案　⇨　バルナバ

（目的）

先に第一次伝道旅行で宣教した各地を再訪問

それらの教会にも決議書を届ける

(2)同行者をめぐって二人の対立＆論争

ヨハネ・マルコを再び連れて行きたいバルナバ

〃　　連れていかないパウロ

⇩

第一次旅行で、パンフィリアで離反・一人で帰郷

（反目・不和の原因）

①当時のマルコは同行者として不適任としたパウロ

後には同労者として評価（ｺﾛｻｲ 4･10　ﾋﾟﾚﾓﾝ 24　ﾃﾓﾃⅡ 4･11）

②異邦人問題に関する相違　　ガラテヤ　２・１３～１４

ユダヤ人が来ると異邦人に対する態度を変えるペテロ、追従したバルナバ

パウロは面と向かって非難

(3)別行動

バルナバはﾏﾙｺを連れてキプロスへ

パウロはエルサレムに帰っていたシラスを選び、シリア、キリキアへ

アンティオキア教会から、主の恵みにゆだねられて出発

Ⅲ．結び

(1)第一次伝道旅行と第二次伝道旅行の間でのエルサレム会議の意義と影響

本格的に異邦人世界に福音が宣べ伝えられるための基盤を承認

〃　　活動の拡大・前進の糸口

(2)働き人同士の間の問題の解決

正直・率直に問題を明らかにする

解決は現実的に（みことばに基づいて）

感情的対立は一時的に納め、それ以後は冷静に対応する

(3)神の人知を越えた御計画

人間の失敗や破れさえも、ご自身の栄光を現す方向に向けてくださる

(4)人間の側の前向きな従順

失敗や問題に引きずられないよう、脱出・解決を主に求める